

「2023年度タイ・チューラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学教育学部1年 富田 絢野

今回のサマープログラムに参加して、実際にその土地で異文化に触れたことで、これまで自分になかった新しい視点を得られたことが一番の収穫だった。まず、街を歩いているときの空気も目に入る景色も聞こえてくる音も日本とは全く異なり、すべてが新鮮だった。実際にタイの生活様式で生活してみて、もちろん慣れない部分も多くあったし、現地の人と交流してみて考え方や価値観の違いを感じることもあった。初めは、このような違いに衝撃を受け、戸惑ったりショックを感じることもあったが、これまで自分が当たり前にしてきたことが世界では当たり前ではないことを身をもって感じる機会になった。常識だと思い込んでいたことに対して以前とは違う見方をすることができた。そしてまた、タイと日本の違いを感じるたびに、日本や日本人の特徴を客観的に振り返ることができた。このように、日本にいと普通のこととして目を向けないことも、外国との比較を通して注目することができたのが貴重な経験であった。

次に、このプログラムの中で外国語学習の意義を再確認することができた。正直にいうと、これまでの私はテストで点数を取るために外国語を勉強していた節があった。外国語を学校で習っても実際にその言語で話す機会が少なく、言語がコミュニケーションにおいて重要な役割を果たすツールだという意識が持てていなかった。しかし、今回のプログラムでタイ語（日常会話レベル）を教わり、現地の人とタイ語でやりとりする中で、共通の言語で会話することに意味があるのではないかと思うようになった。もちろん、現地の人とやり取りする際、ジェスチャーや写真、機械翻訳を用いればだいたいの意思是伝わったが、翻訳機を用いた場合は翻訳されるまでのわずかな時間で会話のテンポは失われ、円滑に会話することは難しく感じた。やはり、お互いがタイ語や英語（一部のタイ人には英語が通じる）など共通の言語で話している状態の方が、会話もスムーズであったし、ストレートに意味が伝わっている安心感もあって、より親しく意思疎通ができていたように思った。また、タイの日本語専攻の学生さんに、ある日本語の意味を尋ねられた時、他の日本語や英語、タイ語に言い換えて説明するのに困ったことがあった。そのとき、その言語でしか表現できない特有のニュアンスがそれぞれの言語にはあることを改めて思い知った。このような経験から、言語の本来の役割は人と人とのコミュニケーションをつなぐものであって、異文化交流・異文化理解のためには言語を学ぶことが大きなカギになると考えるようになった。これは、便利な機械翻訳があるのだから外国語学習は最低限で良いだろうと安直に考えていた自分にとって、価値のある気づきであった。

最後に、このプログラムを通して異文化交流の意義や楽しさを知り、京都大学に来ている留学生ともっと積極的に関わってみたいと思っている。会話で用いる言語を流暢に話せなくともコミュニケーションをとれることや、話すことでしか言語は上達しないことを実感したからだ。合わせて、まずは実際に対面して関わることからしか異文化交流も異文化理解も始まらないことも今回学んだことの一つだ。この大学には留学生と交流できる環境がたくさんあるため、そのようなチャンスを積極的に活用してこのプログラムで得た学びを行動に移していきたいと思う。